

追手門学院大学
心理学部紀要第20巻抜刷
2026年3月1日発行

論文

自動車運転行動傾向と関連するパーソナリティ要因

東 正訓

Personality Factors Associated with Driving Behavioral
Tendencies

Masanori HIGASHI

論 文

自動車運転行動傾向と関連するパーソナリティ要因

東 正訓*

Personality Factors Associated with Driving Behavioral Tendencies

Masanori HIGASHI

要 約

種々の自動車運転行動とその背景にあるパーソナリティ特性との関連を明らかにするため、Big 5、HEXACOモデル、ダークパーソナリティを中心に文献的検討を行った。Big 5では、勤勉性・協調性の高さ/低さが安全/危険運転行動と関連することが示唆された。ダークトライアド（ナルシシズム、マキャベリアニズム、サイコパシー）は攻撃的・反社会的な運転行動と関連し、HEXACOモデルのHonesty-Humility因子は危険運転行動と負の相関が予想された。今後はfacet単位の分析からよりきめの細かいパーソナリティ特性と運転行動傾向の関連分析が望まれる。最終的には、Big 5やHEXACOモデルをもとにしたパーソナリティ特性尺度の評価結果を活用した運転者教育や事故後のカウンセリングへの応用が期待される。

キーワード：運転スタイル、危険な運転行動、Big 5、HEXACOモデル、
ダークパーソナリティ

* 追手門学院大学心理学部

1 はじめに

A man drives as he lives. (人はその人の生き方のように運転する)と言われるように、危険運転をする人の背景には、その人の生き方に影響を与えている性格（パーソナリティ）要因がある。本稿は、ドライバーの運転行動とパーソナリティ特性との関係についての実証的研究の準備として文献的検討を行ったものである。

2 パーソナリティ特性

パーソナリティ変数の中でも持続的である特性変数をパーソナリティ特性（personality traits）という。持続的で内的な要因であるパーソナリティ特性は、特定の状況で特定の行動に影響を与えるというよりむしろ様々な状況を越えて影響を与える。例をあげると、不誠実で協調性が低くルールを守らない特性を持つ人は、危険な運転行動をするし、職場や社会の種々のルールを無視するといったことである。パーソナリティ特性論（trait theory）とは人々の性格の違いを表現し位置づける枠組みや測定尺度を構成し、個人差の測定を試みる理論的立場である。

2.1 パーソナリティ特性論としてのBig 5

パーソナリティ特性論は、第2次世界大戦後、因子分析法の普及とともに、16因子（Cattell, 1957）、2因子（Eysenck, 1957）というように様々な因子数が提案されてきた。近年Big 5がおおよそ妥当ではないかということで、測定尺度も開発され、汎文化的な因子構造の安定性が検証されている（Costa & McCrae, 1995）。現在、Big 5は世界で最も利用される標準的なパーソナリティ特性論である。運転行動研究においてもBig 5との関係を検討したものが多い。

まず、Big 5の各因子の内容のイメージを以下にしめす。これらは、Big 5を測定するNEO-PI-Rの日本語版の標準化をおこなった下仲ら（1997）のAppendix（p.146）にあるNEO-PI-Rの次元及び下位次元に関する要約や日本人を対象として項目反応理論を用いて形容詞によるBig 5の短縮版を作成した並川ら（2012）の分析結果を参考にしたものである。

- ① 神経症傾向（Neuroticism）；高得点者は神経質、情緒不安定、不安感もちがちである。低得点者は情緒的に安定しており、穏やかでのんき、気楽である。
- ② 外向性（Extraversion）；高得点者は対人接触を好み、付き合いがひろく、社交的で出しゃばり、活動的でポジティブ感情をもつ。リスクが高い楽しい活動に参加する傾向があり、刺激追求欲求（sensation seeking）と共通性があるとされる。低得点者はいわゆる内向的な人であり、対人的場面ではおとなしく控えめで慎重である。
- ③ 開放性（Openness to experience）；高得点者は創造的で興味が拡散するといった好奇心が強い人である。低得点者は一つのことに集中し、実用主義的で時には閉鎖的であるが職人芸

的な達成をうみだすことがある。

- ④ 協調性 (Agreeableness)：高得点者は気立てがよく、協調的、信頼でき、人を支援する傾向があり、他人とうまくやっていくことを重視する。低得点者は、他者と協調するより、自己利益を優先し、おこりっぽく、同情がなく、非協調的である。
- ⑤ 勤勉性 (Conscientiousness)：誠実性ともよばれる。高得点者は責任感があり、サボらず、達成的で、自己制御ができる。極端に低い場合は、無責任、注意散漫、衝動的でなまけもの、頼りにできない人と見られがちである。

2.2 Big 5の測定尺度 —NEO-PI-R、BFI-2、BFAS、TIPI

Big 5の測定尺度として、項目数も多く内容的にもまとまった質問紙法パーソナリティ検査がNEO-PI-Rである。

表1 NEO-PI-Rのドメインとファセット

ドメイン・ファセット名	日本語訳
N = Neuroticism	神経症傾向
N1 : Anxiety	不安
N2 : Angry Hostility	怒り－敵意
N3 : Depression	抑うつ
N4 : Self-Consciousness	自意識
N5 : Impulsiveness	衝動性
N6 : Vulnerability	傷つきやすさ
E = Extraversion	外向性
E1 : Warmth	温かさ
E2 : Gregariousness	群居性
E3 : Assertiveness	自己主張性
E4 : Activity	活動性
E5 : Excitement Seeking	興奮追求
E6 : Positive Emotions	肯定的感情
O = Openness to Experience	経験への開放性
O1 : Fantasy	空想性
O2 : Aesthetics	審美性（芸術的関心）
O3 : Feelings	感覚性
O4 : Actions	行動（新しい経験や活動）
O5 : Ideas	アイディア
O6 : Values	価値観（リベラリズム、革新性）

A = Agreeableness	協調性
A1 : Trust	信頼
A2 : Straightforwardness	実直さ
A3 : Altruism	愛他心
A4 : Compliance	順応性 (協力的で衝突回避)
AS : Modesty	謙虚さ
A6 : Tender-Mindedness	思いやり (やさしさ、共感、思いやり)
C = Conscientiousness	勤勉性
C1 : Competence	能力
C2 : Order	秩序
C3 : Dutifulness	義務感
C4 : Achievement Striving	達成志向
C5 : Self-Discipline	自己規律
C6 : Deliberation	慎重さ

① NEO-PI-R

Costa & Macrae (1995) は、成人対象のNEO-PI-Rを作成し、Big 5のパーソナリティインベントリを作成した。この検査では、Big 5因子のそれぞれの次元 (domain) につき、6 個の下位因子 (facet) を設定している。表1は、Costa & McCrae (1995) の各因子のfacetを示している。このfacet一覧は、後の研究が様々組み合わせて使うfacetの母型といえるものである。facet単位の測定が可能な種々のBig 5尺度が扱うfacetは、このリストの一部を採用したものである。

NEO-PI-Rは240項目からなる。5段階のリッカート尺度で評定する。facetごとに得点をだして、個人のプロフィールを描くことができる。応用研究に利用する際には、項目数が多いことと商用製品であることに留意しなければならない。NEO-PI-Rの日本語版 (下中ら, 1999) として、NEO-PI-R人格検査及び短縮版のNEO-FFI人格検査が利用できる。

このNEO-PI-Rの測定範囲が5因子の母型となっていくが、別バージョンや短縮版作成の中で含まれるfacetに違いがでてくることに注意すべきである。先の因子のイメージの説明では明確ではなかったが、Costa & Macrae (1995) のNEO-PI-Rの神経症傾向 (Neuroticism) のfacet (各因子の下位尺度) には、「怒りと敵意 (Angry Hostility)」が入っている。下仲らによる日本語版の神経症傾向のfacetでは怒りとして入っている。その後作られたfacet単位の短縮版、次に紹介するBFI-2などでは、敵意や衝動性は神経症傾向因子に含まない場合があるので、利用する際は気をつけておく必要がある。なお、下仲らによる日本人サンプルの因子分析では、怒りfacetは、神経症傾向にやや高い正の負荷、調和性に弱い負の負荷を示し、一因子にのみに純粹に負荷を示すのではなく、両義性を弱く持つ。そのために、短縮版を作る際にはシンプルな負荷をもつfacetが優先されたのではないかと考えられた。

ここで文献検討の中で気づいたfacet単位でのインベントリ間での扱いの違いを記しておく。NEO-PI-Rの外向性に含まれる興奮追求は交通心理学では危険な運転行動の背景因とされる刺激追求と類似しているが、BFI-2には同facetはない。なお、後述のHEXACOモデルではAngry Hostilityは協調性に含まれる。同モデルでは、NEO-PI-Rの協調性に入っている「謙虚さ」や「実直さ」のfacet要素が協調性から分離され、honesty-humilityとして独立した因子を形成した。応用研究に利用する際には、モデルやインベントリによって、因子およびfacetの内容の細かい差異に注意すべきである。

本研究では因子（domain）レベルの尺度得点のみを分析するのではなく、facet単位での尺度得点をまずは分析対象とすることを目指しているため、以下では、facet単位での測定が可能な代表的尺度を中心に紹介する。

② BFI-2

Big Five Inventory-2 (BFI-2) はSoto & John (2017a) によって開発されたもので、各因子につき3つのfacetで測定する60項目の質問紙である。表2は、同インベントリのfacetsを一覧にしたものである。表1のNEO-PI-Rよりもfacet数が減っていることがわかる。BFI-2では、神経症傾向を否定的情動性としているが、同じく神経症傾向とみてよい。

このインベントリでは、黙従反応バイアス（acquiescence bias）を抑制する工夫がされている。黙従反応とは項目の内容に対して自分の意見にもとわずに同意してしまいがちなことで、項目間相関を高めてしまう可能性がある。そこで、各因子のfacetにおいて逆転項目を半数いれることにより抑制しようとしている。

表2 BFI-2のドメインとファセット

ドメイン・ファセット名	日本語訳
Open-Mindedness	開放性
Creative Imagination	創造的想像力
Intellectual Curiosity	知的好奇心
Aesthetic Sensitivity	美的感性
Extraversion	外向性
Energy Level	活力
Assertiveness	自己主張性
Sociability	社交性
Agreeableness	協調性
Respectfulness	敬意
Compassion	思いやり
Trust	信用

Conscientiousness	勤勉性
Productiveness	生産性
Responsibility	責任感
Organization	秩序
Negative Emotionality	否定的情動性
Emotional Volatility	情緒不安定性
Anxiety	不安
Depression	抑うつ

BFI-2の短縮版であるBFI-2-S（30項目）やBFI-2-XS（15項目）も開発されている（Soto & John, 2017b）。BFI-10は10項目版である（Rammstedt, B., & John, O.P., 2007）。これらについては、日本人サンプルをもちいて、信頼性と妥当性を検証した日本語版も作成されている（Yoshino, et al., 2022, 吉野ら, 2026）。

③ BFAS

脳神経科学など応用研究に広く用いられているのが、De Young et al. (2007) が開発したBFAS（the Big Five Aspect Scales）というインベントリである。この尺度の特徴は、Big Fiveの各因子に負荷する全項目（domain）を相関する2つのアスペクト（aspect；側面）に分けて合計10のアスペクトを測定評価する100項目の質問紙である。この尺度は、facetとドメインの間の「中間レベル」の構造を捉えることをねらったものである。

④ International Personality Item Pool

Big 5の語彙論アプローチで知られるGoldberg（1999）が開発したオープンソースのアイテムプールであり、尺度群をまとめたものである。NEO-PI-Rと同じfacetを備える。特段の許可がなくとも、フリーで翻訳、表現の修正ができるメリットがある。300項目版、120項目版、50項目版がある。50項目版は応用研究の場面で利用されている。

⑤ TIPI

最後に紹介するのは、BFI-10と同じく10項目で測定するTen Item Personality Inventory（TIPI）である。この尺度は多方面で用いられており、信頼性はやや低いものの妥当性の検証に適している。このTIPIはGosling, Rentfrow, & Swann（2003）によって開発されたビッグ・ファイブ性格特性を測定する10項目の超短縮版尺度である。この尺度は、各ビッグ・ファイブ因子を2項目（1つの正方向項目と1つの負方向項目）、7件法で測定する。日本語版は小塩真司、阿部晋吾、カトロニ ビノによって2012年に作成され、その信頼性および妥当性が検証され、多くの交通心理学的研究に用いられている（小塩・阿部・Pino, 2012）。緻密なバックトランスレーションなどを経て、最終的な日本語版は、TIPIの原版開発者によって確認され、その適切性が認められている。信頼性が乏しい尺度もあるが全体的に項目数のわりには妥当性が認められることが多い。そこでTIPI-Jは、診断には向かないが応用研究に利用するうえで実用性が高

い尺度であるといえる。

2.3 Big5と危険な運転行動

危険運転に関係するBig 5特性の第1は、勤勉性である（Schwebel, Severson, Ball & Rizzo, 2006, Linkov, Zaoral, R`ezác, & Chih-Wei Pai, 2019, Hussain, Sato, Miwa, & Morikawa, 2020）。勤勉性が高いドライバーは、交通ルールをきちんと守り、計画的で安全な運行をすると考えられる。第2に、協調性である（Hussain, Sato, Miwa, & Morikawa, 2020）。協調性が高いドライバーは、他者に対して攻撃的な運転（あおり運転やリスクを伴う衝動的な運転）をしないと考えられる。また、刺激追及欲求や衝動性も危険運転に関係することが古くから指摘されているが、Big 5の観点からみると、これらは高い外向性、低い神経症傾向、低い協調性（衝動抑制の低さ）と関連があると考えられる。神経症傾向の高い人は不安ゆえにスピードを出すなど危険運転をしないとみられるが、情緒不安定な時に事故と関わりやすいとみられる。そこで、神経症傾向と事故傾向性の関連に関する知見に一貫性は認められていない。

職業ドライバーの自動車事故を減らすために構築された適性診断のナスバネット（神作, 1983；安全指導部, 2008）における検査尺度には、感情の安定性（30項目）、協調性（23項目）、気持ちのおおらかさ（12項目）、他人に対する好意（12項目）がある。この検査尺度をBig 5の観点から見直すと、感情の安定性は神経症傾向因子のfacetの「怒り・敵意（Angry Hostility）」、「情緒不安定性（Emotional VolatilityまたはEmotional Instability）」と関わりとみられ、その他の3尺度は、Big 5の協調性因子の下位特性とみることができる。Big 5の勤勉性、調和性にくわえて、神経症傾向のfacetである「怒り・敵意（Angry Hostility）」を加えて、危険な運転行動とBig 5のfacet単位での関連分析を行うことが期待される。

注）本稿投稿後、運輸業に携わるドライバーを対象としたBig 5と種々の危険運転行動傾向に関するアンケートデータを得た。相関分析によれば、協調性と危険な運転傾向との負の相関が比較的多く、次いで勤勉性、神経症傾向との負の相関がみられた。詳細は別稿で報告する予定である。

3 ダークパーソナリティと危険運転

3.1 ダークトライアド

ダークトライアド（Dark Triad）に代表されるダークパーソナリティ（dark personality）と危険な運転行動との関連を検討する交通心理学的研究も増えてきた。危険な運転行動の中には、悪質で攻撃的で反社会的とみなされる行動が多いことから、反社会的行動に関わるダークパーソナリティとの関連を検討することは欠かせないといえる。

ダークパーソナリティの研究は、古くはサイコパシー（Psychopathy）の特徴が記述されたところからはじまり、1980年に始まるHare（1991）のPsychopathy Checklistの開発をへて、2000

年初頭にサイコパシーにくわえて、ナルシシズム、マキャベリアニズムの概念がダークトライアドとしてPaulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002) によって提唱された。

Dark Triadは、以下の3つのネガティブなパーソナリティ特性である。

- ① ナルシシズム (Narcissism)；いわゆる自己愛の強さを示すもので、自己誇大感を示し、傲慢で、権利意識、優越感、賞賛への欲求を強く持つ。
- ② マキャベリアニズム (Machiavellianism)；他者を操作し、搾取する傾向であり、シニカルで非道徳的に振舞う。
- ③ サイコパシー (Psychopathy)；共感性が欠如し、衝動的で、感情が冷たく、反社会的な傾向を示す。

これらにサディズム (Sadism) を加えた計4つの特性をダークテトラッド (Dark Tetrad) とよぶ (Buckels, E. E., Jones, D. N., & Paulhus, D. L., 2013)。

3.2 ダークトライアドと危険な運転行動の関連

これらのダークパーソナリティは様々な反社会的行動を理解するうえで大変有用である。交通心理学の領域では、ダークトライアドの3特性は危険な運転行動と関連が高いことが報告されている。特に自己中心的で、他者、他車を省みない運転行動、例えば、あおり運転、攻撃的運転、幅寄せや車間距離をつめるなどの自分も危険にさらされるにも関わらず執拗な妨害や報復行為を繰り返すなどの行動説明に有用である。いくつかの代表的な研究知見を以下に紹介する。

Burtăverde, V., Chraif, M., Aniței, M., & Mihăilă, T. (2016) は、マキャベリアニズム、ナルシシズム、サイコパシーが運転攻撃性と関連していることを明らかにした。ダークトライアド特性はBig 5性格要因よりも運転攻撃性を予測する際には増分的妥当性を示し、特にサイコパシーがダークトライアド特性の中で最も強い増分効果をもたらすことが示された。さらに、マキャベリアニズムとサイコパシーは、情緒的安定性・協調性・勤勉性といった特性と攻撃的運転行動との関連性を媒介していた。全体として、これらの知見はダークトライアドが示す新たな個人差が運転攻撃性の説明変数として寄与することを明らかにすると同時に、ダークトライアドがBig 5性格特性と強く重複しない独立した人格領域の構成概念であることを裏付けるものであるとしている。

Ball, Tully, & Egan (2018) は、ダークトライアド3特性が、運転中の怒り (driving anger)、一般的攻撃性 (general aggression)、衝動性 (impulsivity)、悪意ある運転意図 (malign driving intent) の帰属とともに、自己申告による攻撃的運転の潜在的要因として果たす役割を検証した。回帰分析により、サイコパシー、他者への身体的攻撃歴、およびdriving angerの「進行妨害」側面が、自己申告による攻撃的運転行動の分散の50.8%を説明した。構造方程式モデリングによって、ダークトライアドが直接、運転中の怒りに影響するのではなく、一般的攻撃性を介して、運転中の怒りに影響することを示した。

Bushman, B. J., Steffgen, G., Kerwin, T., Whitlock, W. M., & Weisenberger, J. (2013) は、ナルシシズム、すなわち自己愛が強い人ほど運転時の怒りや攻撃的運転をしやすいことを示した。特権意識が脅かされると攻撃的になり、優越感と共感性の欠如から運転違反をしやすくなると考えられる。

3.3 ダークパーソナリティの測定尺度

日本でもダークトライアドと危険な運転傾向との関係を検討した学会発表が見られるようになった。各尺度の日本語版の開発が大いに研究を促進したといえる。ここでダークパーソナリティの測定について概観しておく。

ダークトライアドの尺度は、ナルシシズム、マキャベリアニズムの尺度が先行的に存在していたが、後に3特性を簡便な尺度で測定する試みが見られた。Short Dark Triad (SD3) (Jones & Paulhus, 2014) やDark Triad Dirty Dozen (DTDD) (Jonason & Webster, 2010) である。そして、DTDDの日本語版は、田村ら (2015) によってなされ、12項目と簡便であるために、交通心理学の研究でもよく用いられている。また、下司・小塩 (2017) によるShort Dark Triad (SD3) 日本語版もある。こちらは各因子9項目、計27項目である。

今後、ダークテトラッドのsadismや新たに加わったspite傾向 (増井・下司, 2023) を測定する尺度と、自らを危険にさらしても行われる執拗なあおり運転や報復行為などの危険な運転行動との関連も検討されていくと見られる。

3.4 ダークパーソナリティとBig 5およびHEXACO

ダークトライアドとBig 5は関連する (Paulhus, D. L., & Williams, K. M., 2002)。協調性と強い負の相関、勤勉性と負の相関をもつ。それ以外の関係はやや複雑で不明確である。外向性の下位側面である社交性、自己主張はナルシシズムと正相関をしめす。サイコパシーと神経症傾向の衝動性、情緒不安定性と正相関がみられることもある。ダークトライアドが一つのダークパーソナリティとして統合して扱えると言い切れないのは、個々がこのような機能や構造の違いを示すからであろう。

ダークパーソナリティと、ほぼBig 5特性に近い因子群にHonesty-Humility factor (正直さー謙虚さ因子)、いわゆるHファクターを加えたHEXACOモデルとの関連も論じられるようになった。HEXACOモデルのHonesty-Humility factorは、ダークパーソナリティ全体と負の相関が見られるからである。Honesty-Humility factorの負の方向の表現は、他者を操作、搾取し、自分の利益を優先する傾向である。Hファクターはダークパーソナリティの核心部を捉えていると見ることができる。次にHEXACOモデルについて検討する。

表3 HEXACOモデルのファセット

ファセット名	日本語訳
Honesty-Humility	正直さ－謙虚さ
Sincerity	誠意
Fairness	公平さ
Greed Avoidance	貪欲回避
Modesty	慎み深さ
Emotionality	情動性
Fearfulness	恐れ
Anxiety	不安
Dependence	依存性
Sentimentality	感傷性
Extraversion	外向性
Expressiveness	表現力
Social Boldness	社会的度胸
Sociability	社交性
Liveliness	活発さ
Agreeableness	協調性
Forgiveness	寛容さ
Gentleness	優しさ
Flexibility	柔軟性
Patience	忍耐強さ
Conscientiousness	勤勉性
Organization	組織性
Diligence	勤勉さ
Perfectionism	完璧主義
Prudence	慎重さ
Openness to Experience	経験への開放性
Aesthetic Appreciation	美的鑑賞力
Inquisitiveness	好奇心
Creativity	創造性
Unconventionality	型破りさ

4 HEXACOモデル－ダークパーソナリティとHファクター

HEXACOモデルは、カナダの研究者LeeとAshtonが提唱したものである。1997年に韓国人大学生から得たデータでBig 5が再現されるかを検討中、試しに6因子解を出したことが発端である。この6因子解のうち外向性、誠実性、経験への開放性は因子レベルで実質的に等価であった

が、解釈可能な6個目の因子が見つかった。それがHonesty-Humility（正直さ－謙虚さ）因子であった（Lee, K., & Ashton, M. C., 2012；小塩・三枝・橋本・下司・吉野訳, 2022）。Hファクターと称されることがある。

HEXACOモデルに加わったHonesty-Humility因子は、道徳的、倫理的行動の背景となる因子である。この因子には、誠実さ、公平さ、貪欲のなさ、謙虚さといった次のfacetを有している。誠実さ（Sincerity）；対人関係において誠実である傾向。低得点者は恩恵を得るために他人をほめたり、好意を装ったりするが、高得点者は他人を操作することを嫌う。

公平性（Fairness）；不正や腐敗を避ける傾向。低得点者は不正や窃盗による利益獲得をいとわないが、高得点者は個人や社会全体から搾取することを拒む。

貪欲回避（Greed avoidance）；豪華な富、贅沢品、高い社会的地位の象徴への無関心傾向。低得点者は富や特権を享受・誇示したが、高得点者は金銭的・社会的地位への動機付けを特にもたない。

謙虚さ（Modesty）；謙虚で控えめである傾向。低得点者は自らを優越した存在と見なし、他者が持たない特権を当然の権利と考える。一方高得点者は自らを特別な扱いを受ける権利のない普通の人間と認識する。

このHonesty-Humility因子の低得点方向がダークテトラッドの潜在変数とはほぼ被る（潜在変数間の相関が $-.95$ ）ことを示す研究がある（Hodson, et al., 2018）。これは、ダークテトラッドの概念設定に関わる重要な問いかけである。ダークパーソナリティとHファクターが同等かなのかをめぐる議論は本稿の範囲を超えてしまうが、今後の展開を待ちたい。実務的には、運転者適性を測定する際に、ダークテトラッドを使う代わりにHファクターを使うことも可能だということの意味する。

HEXACOモデルのfacetを一覧にしたのが、表3である。Big 5のFacetsを載せた表1と比較すると、Big 5とHEXACOモデルとの共通性と差異がわかる。例えばBig 5の神経症傾向に対応するのがHEXACOモデルでは情動性（emotionality）である。この情動性には感傷性が含まれることがBig 5の神経症傾向との違いである。

先に概観したダークパーソナリティと危険な運転傾向との関係の諸研究と平行して、HEXACOモデルと危険な運転傾向との関係も検討が進んでいる。Burtäverde, et al. (2017) は、HEXACOモデルと危険運転行動との関連性、およびBig 5モデルと比較したHEXACOモデルの危険運転行動説明における予測力を検証した。Honesty-Humility因子は、あらゆる形態の攻撃的運転行動、不適応的・適応的運転スタイルとの関連を見出し、言語的攻撃的表現、危険運転、高速運転、慎重運転の予測において増分的妥当性を有することを示し、さらに、Big 5モデルと比して、HEXACOモデルは攻撃的運転の予測においてより優れた予測力を有していたと結論づけた。今後、HEXACOモデルと自動車運転傾向との関係がより検討されていくだろう。Big 5にHファクターを加えているために、検査項目が増えることになるが、60項目のHEXACO-60や24

項目の超短縮版が提案された。すでに厳密な心理測定学的検討がなされた日本語版も構成されている (Wakabayashi, 2014)。これらは応用研究に大いに役立つだろう。

5 結びにかえて

本稿では、自動車運転傾向に影響を及ぼすパーソナリティ要因を明らかにする実証的研究の準備として、パーソナリティ特性論のうち、Big 5、HEXACOモデル、ダークパーソナリティを中心に因子とfacetの内容、測定法、相互の関連および運転行動傾向との関連について概観した。

以下では、パーソナリティ特性を用いた研究の意味、facet単位での測定計画、今後の課題について述べる。

(1) 性格特性論から見た運転行動

交通事故の3大原因は人・クルマ・道路要因であるが、なかでも人的要因の影響力は9割以上と大きい。その背後に認知的、性格特性が関連すると見られる。注意すべきは、性格が事故の有力で決定的ないし至近要因とは考えないということである。特定の性格特性が強い人がある種の事故を起こしやすいということが統計的に見られたとしても、性格が原因であるとはいわない。あくまで性格は背景要因である。

パーソナリティ特性は遺伝・環境の相互作用のもと形成されたと考えられている。Big 5、HEXACOモデル、ダークパーソナリティはそれぞれ生物学的な影響を受けた潜在的な個人差変数である。Macrae & Costa (1999) が提唱したFive factor theoryにおいては、これらを基本特性 (basic tendency) とよぶ。これらよりも行動に影響をもつであろう、個々人の生きる環境下で獲得されたスキル、習慣、態度、対人関係スキル・スタイルは、基本特性の影響を受け、人々が個々人の生活環境を過ごす中で具体的な個人差として現れたものである。これらを特有的適応 (characteristic adaptation) とよび、個人特有の環境への適応として獲得された種々の傾向性であり、特定行動に及ぼす機能をもった個人差変数とする。例えば運転態度、運転習慣、運転スタイルが該当する。特有的適応の諸要因は、性格特性のコア部分とは異なり、環境、家族関係、発達段階のどこにいるかで影響をうけて、後天的に形成されたものである。そこで運転態度、運転時の悪習慣、悪質な運転スタイルは基本特性としてのパーソナリティ要因よりも変容可能性がある。

まずは、ドライバーを対象としたパーソナリティ特性を効率的に測定し、パーソナリティ特性と特有的適応変数としての運転行動傾向に関わる諸変数の関連研究が十分に行われる必要がある。特定の運転行動傾向やスタイル、習慣との関係が明らかとなったパーソナリティ特性の特徴を有するドライバーに効果的な働きかけをする情報が得られることを期待したい。

(2) facet単位の分析の有効性

Big 5やHEXACOモデルを使った自動車運転傾向との関連を検討する研究を構想する際、因子

得点や因子に対応した尺度得点を用いた相関分析をするよりも、facetの尺度得点を用いる方が適切であると考えられる。その理由の第1は、因子単位の相関、負荷量、パス係数を検討するよりも、因子を構成するfacet単位の分析結果の方が情報を多く含むため、粒度が細かい分析ができることである。もう一つの理由は、facetの一部は、複数の因子に負荷する、すなわち多義的であることである。因子単位の分析では、個々の関係が混ざって重要な情報がマスキングされやすいと思われる。危険な運転行動にも攻撃的な運転、ルールを無視した運転、不注意な運転と様々ある。また、他者配慮の向社会的運転もある。これらの運転傾向に対して、因子単位よりもfacet単位の個々の影響度を見る方が豊富な情報が得られるであろう。但し、facet単位で尺度得点を求めるには、ある程度の内的整合性が必要である。また、短縮版の尺度を使う場合に、自動車運転傾向を予測するために必要なfacetがそろっているかどうかを確かめて、必要ならば追加することが必要である。

(3) 今後の課題

無謀としか言いようのない危険な運転行動や向社会的運転行動を理解するうえでBig 5やダークパーソナリティの観点は役立つ。種々提案されている尺度を使った実証研究の知見が集約されることが必要である。大まかな予想としては、勤勉性、協調性の低さが違反や危険な運転に影響し、スリル追求や衝動的な運転には、外向性に関わるとみられる。神経症傾向がどのような関わりを見せるかは興味深いところである。そしてHEXACOモデルのHonesty-Humilityは、危険な運転行動全般に関わるだろう。今後の実証研究の結果が待たれるところである。これらに加えて、刺激追求欲求 (sensation seeking)、衝動性 (impulsivity)、不注意傾向 (inattention)、楽観バイアス (optimistic bias)、自己制御運転傾向 (self-regulation driving) など、パーソナリティ特性以外に交通心理学で扱われてきた個別特性や認知的傾向とBig 5などのパーソナリティ特性との関連を検討する必要がある、現在、測定計画を実行中である。

最終的には、これらの研究成果をドライバーのパーソナリティ検査結果にもとづく運転指導や事故を起こしたドライバーのカウンセリングなどに生かしていきたいと考えている。

6. 引用文献

- 安全指導部 (2008). 診断テスト実施の手引き 2007の補足としてのナスバネット対応手引き暫定版及びナスバネットによる適性診断手法開発に関する各種資料 自動車事故対策センター.
- Ashton, M. C., & Lee, K. (2009). The HEXACO-60: A Short Measure of the Major Dimensions of Personality. *Journal of Personality Assessment*, 91 (4), 340-345, 2009
- Ball L, Tully, R., Egan, V. (2018). The influence of impulsivity and the Dark Triad on self-reported aggressive driving behaviours. *Accident Analysis & Prevention*, 120, 130-138.
- Buckels, E. E., Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2013). Behavioral confirmation of everyday sadism. *Psychological Science*, 24(11), 2201-2209.

- Burtăverde V, Chraif M, Aniței M, Mihăilă T. (2016). The incremental validity of the dark triad in predicting driving aggression. *Accident Analysis & Prevention*. Nov;96:1-11. doi: 10.1016/j.aap.2016.07.027.
- Burtăverde, V., Chraif, M., Aniței, M., & Dumitru, D. (2017). The HEXACO Model of Personality and Risky Driving Behavior. *Psychological Reports*, 120(2), 255-270.
https://doi.org/10.1177/0033294116688890 (Original work published 2017)
- Bushman, B. J., Steffgen, G., Kerwin, T., Whitlock, T., & Weisenberger, J. M. (2018). "Don't you know I own the road?" the link between narcissism and aggressive driving. *Transportation Research Part F: Traffic Psychology and Behaviour*, 52, 14-20. https://doi.org/10.1016/j.trf.2017.10.008
- Cattell, R. B. (1957). *Personality and motivation: structure and measurement*. Yonkers, NY: World Book.
- Costa, P. T., & McCrae, R.R. (1995). Domains and Facets: Hierarchical Personality Assessment Using the Revised NEO Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, 64(1): 21-50
- DeYoung C.G., Quilty LC, Peterson JB. Between facets and domains: 10 aspects of the Big Five. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93(5): 880-96. doi: 10.1037/0022-3514.93.5.880.
- Eysenck, H. J. (1953). *The structure of human personality*. New York: John Wiley.
- Goldberg, L. R. (1999). A broad-bandwidth, public domain, personality inventory measuring the lower-level facets of several five-factor models. *Personality Psychology in Europe*, 7, 7-28.
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B., Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, 37, 504-528. Hare, R. D. (1991). *The Psychopathy Checklist – Revised (PCL-R)*. Multi-Health Systems.
- Hodson, G., Book, A., Visser, B. A., Volk, A., Michael C., Ashton, M & Lee, K. (2018). Is the Dark Triad common factor distinct from low Honesty-Humility? *Journal of Research in Personality*, 73, 123-12.
- Hussain, B., Sato, H, Miwa, & Morikawa, T. (2020). Influence of personality traits on aberrant driving behaviors: A comparison of Japanese, Chinese, and Vietnamese drivers. *Journal of Safety Research*, 75, 178-188.
- Jones, D. N., & Paulhus, D. L. (2014). Introducing the short dark triad (SD3) a brief measure of dark triad personalities. *Assessment*, 21(1), 28-41.
- Jonason, P. K., & Webster, G. D. (2010). The dirty dozen: A concise measure of the dark triad. *Psychological Assessment*, 22(2), 420-430.
- 神作博 (1983). 適性診断テストの解説, 自動車事故対策センター
- Kawamoto, S., Soto, C. J., & John, O. P. (2022). A validation of the Japanese adaptation of the Big Five Inventory-2 (BFI-2-J). *Frontiers in Psychology*, 13, 924351. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2022.924351
- Linkov, V., Zaoral, A., R'ezác, P. & Pai, C-W. (2019). Personality and professional drivers' driving behavior. *Transportation Research Part F* 105-110.
- Lee, K., & Ashton, M. C. (2012). *The H Factor of Personality: Why Some People are Manipulative, Self-Entitled, Materialistic, and Exploitive-And Why it Matters for Everyone*, Wilfrid Laurier University Press.
- (パーソナリティのHファクター：自己中心的で、欺瞞的で、貪欲な人たち 単行本 (ソフトカバー) K.リー (著), M.C.アシュトン (著), 小塩 真司 (監修, 翻訳), 三枝 高大 (翻訳), 橋本 泰央 (翻訳), 下司 忠大 (翻訳), 吉野 伸哉 (翻訳), 2022年)
- 並川 努・谷 伊織・脇田 貴文・熊谷 龍一・中根 愛・野口 裕之 (2012). Big Five尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討, 心理学研究, 83 (2), 91-99
- Macrae, R.R. & Costa, P.T. (1999). A Five Factor Theory of Personality. In Pervin & O. P. John (Eds.)

- Handbook of personality: Theory and research* (2nd ed.), New York: Guilford
- 増井 啓太, 下司 忠大 (2023), 日本語版スバイト傾向尺度の信頼性および妥当性の検討, 日本心理学会大会発表論文集, 2023, 87巻, 日本心理学会第87回大会, セッションID 2B-005-PB, p.2B-005-PB, 公開日 2024/06/27, Online ISSN 2433-7609, https://doi.org/10.4992/pacjpa.87.0_2B-005-PB, https://www.jstage.jst.go.jp/article/pacjpa/87/0/87_2B-005-PB/_article/-char/ja
- 小塩 真司, 阿部 晋吾, Pino Cutrone (2012). 日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み, パーソナリティ研究, 21(1), 40-52.
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism, and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, 36(6), 556-563.
- Rammstedt, B., & John, O. P. (2007). Measuring personality in one minute or less: A 10-item short version of the Big Five Inventory in English and German. *Journal of Research in Personality*, 41(1), 203-212.
- Schwebel, D. C., Severson J., Ball, K. K., & Rizzo, M. (2006). Individual difference factors in risky driving: The roles of anger/hostility, conscientiousness, and sensation-seeking. *Accident Analysis and Prevention*, 38, 801-810.
- 下仲 順子, 中里 克治, 権藤 恭之, 高山 緑 (1997). 日本版NEO-PI-Rの作成とその因子的妥当性の検討, 性格心理学研究, 6(2), 138-147.
- 下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑 (1999). NEO-PI-R, NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理.
- 下司 忠大, 小塩 真司, 日本語版Short Dark Triad (SD3-J) の作成, パーソナリティ研究, 2017, 26巻, 1号, p.12-22
- Soto C. J., & John O. P. (2017a). The next Big Five Inventory (BFI-2): Developing and assessing a hierarchical model with 15 facets to enhance bandwidth, fidelity, and predictive power. *Journal of Personality and Social Psychology*, Jul;113(1): 117-143.
- Soto, C. J., & John, O. P. (2017b). Short and extra-short forms of the Big Five Inventory-2: The BFI-2-S and BFI-2-XS. *Journal of Research in Personality*, 68, 69-81. <https://doi.org/10.1016/j.jrp.2017.02.004>
- 田村 紋女・小塩 真司・田中 圭介・増井 啓太・ジョナソン, ピーター カール (2015). 日本語版Dark Triad Dirty Dozen (DTDD-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 24, 26-37.
- Wakabayashi, A. (2014). A sixth personality domain that is independent of the Big Five domains: The psychometric properties of the HEXACO Personality Inventory in a Japanese sample. *Japanese Psychological Research* 56(3), 211-223.
- 吉野伸哉・下司忠大・橋本泰央・上野雄己・三枝高大・小塩真司 (2026) 日本語版Big Five Inventory-2の短縮版の検討 心理学研究
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy/advpub/0/advpub_96.24214/_pdf/-char/ja)
- Yoshino, S., Shimotsukasa, T., Oshio, A., Hashimoto, Y., Ueno, Y., Mieda, T., Migiwa, I., Sato, T., Kawamoto, S., Soto, C. J., & John, O. P. (2022). A validation of the Japanese adaptation of the Big Five Inventory-2 (BFI-2-J). *Frontiers in Psychology*, 13, 924351. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2022.924351>

